



月夜話
編

へ13
3039
4



天

傳記

羊月夜話卷之四

江戸

白頭子柳魚編次



第七回

嶠路消朝霜

禍ハ懈チ存

生く孝の妻女子は妻
あやう うう さい おとろ

ふと並見理金太花倉高四郎

們の若子の黄金を携へ此処に望みと来

つれどそれぞと知る者あり

くみればつめいやくをうやと取早心易

と心怠りしより未夜弥

福嶋の通称

いで
出て岐の棧

みさうらうらふ。待めふけと

蟬丸

れいで失

庭に燈火破る驚馬破

と西個を授命せて返す

二〇
目

はゞとも あ 知らぬ あんな 真の まこと 闇の くらやみ ありあれば ある 丙支 へいし 小星 せうせい

あうまじ

5

挑ふ戦ふと非化方の大勢是方ハ西個

道徳て因縁しるかれ。あゝいぢうあゝあゝ揚て標。河津も
援の勢がた。とりの時。忽ち山石改より。欲み害く大音。みで伏
ぬ。早く討捨。よとめと齊月。下く茂林の裡。あゝと鳴て伏
兵ありと。えとと。理金太。心忙。ひるむ。知れつけ。いそで大。偈。み
閃。とと太刀。と俱。並見。音。音。高てり。小。七。是。み力。み。高。四
良。とと。合て居。く。竟。み。花。倉。み。砍。外。と。係。る。お。く。穴。生。の
小。六。林。中。より。頭。れ。い。で。四。方。八。面。を。斬。て。さ。る。み。十。個。軍。の。或。は
士。撃。手。と。或。は。棧。道。より。逆。み。落。か。ど。て。存。命。者。一。人。あ。り。頃。て。三
人。暗。令。み。う。て。一。知。は。聚。て。ま。づ。准。備。の。摺。燧。み。出。し。て。火。が。あ
付。枯。枝。み。集。て。火。を。焚。つ。け。叔。被。細。布。の。薪。み。逆。り。と。る。薦。を。み

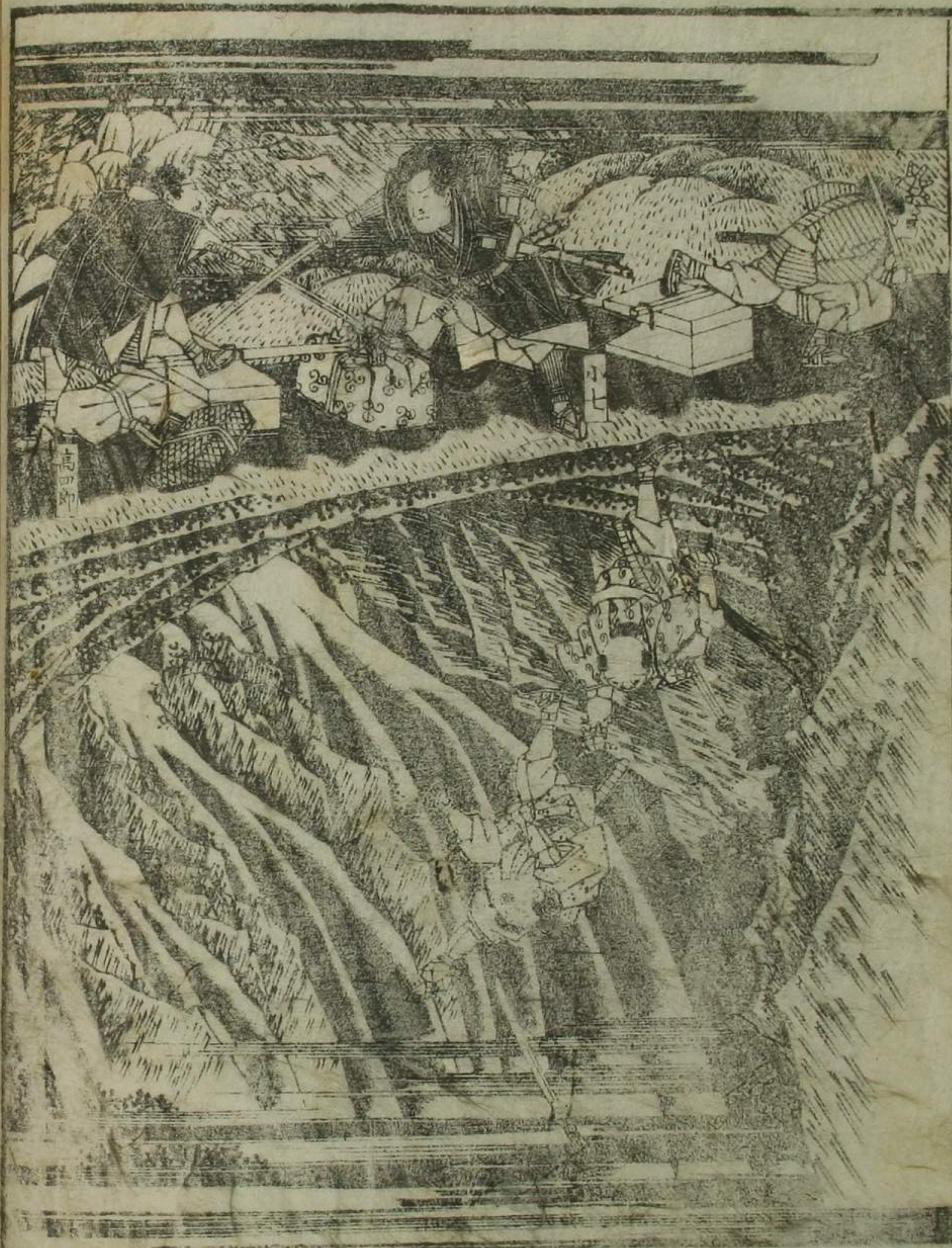
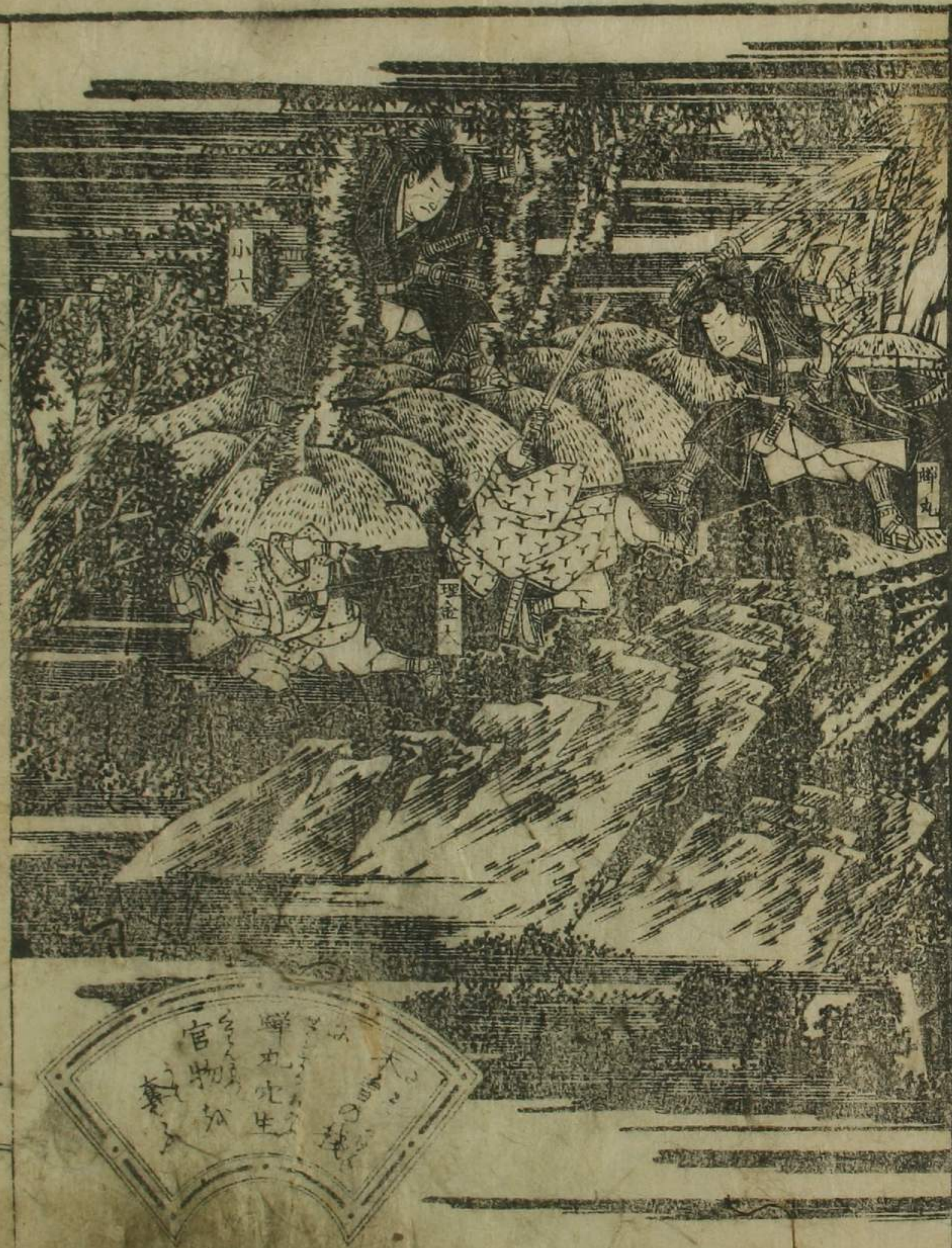
死。く。視。る。み。案。案。は。遠。へ。ど。三。手。金。の。黄。金。其。他。錦。の。卷。絹。玉。の。枝
名。ある。太。刀。唐。の。倭。の。種。の。宝。貝。目。枯。せ。ぬ。と。み。出。り。れ。バ。悦。ぶ。大
う。と。あ。ら。は。蟬。丸。の。頃。て。此。小。品。み。小。六。小。七。み。う。た。擔。し。て。ま。づ。隠。栖。五
飯。の。祝。の。酒。酌。く。く。く。つ。兩。個。み。搗。ふ。み。小。六。の。蟬。丸。は。あ。對。ひ。始。り。者
小。七。と。俱。み。云。は。あ。拾。く。棧。高。い。う。と。む。程。み。汝。の。棧。の。改。少。小。高。と
ホ。の。裡。み。在。て。吾。箇。様。と。夢。み。け。く。と。ん。と。如。斯。答。左。右。の。手
み。て。邊。の。樹。木。み。あ。く。動。く。大。勢。の。人。あ。る。と。み。あ。せ。と。分。付。る
ひ。み。え。米。か。く。思。ひ。く。君。の。計。策。圖。を。と。づ。と。は。音。信。か。た。み
み。めて。大。勢。の。伏。兵。あ。り。と。ん。た。れ。は。肝。が。拉。が。れ。て。軍。集。め。見
み。撃。手。れ。と。べ。り。つ。定。は。微。妙。は。計。策。ま。て。い。と。と。感。激。も。る。と。ん

かうち矢ひ。是亦のり敢て討畧をせんとする。是らとせられど
彼兵書に所謂先づとて人々制し後とて人々制せらる
る。と云ひ類々と縛るなげみ言ひられ兄弟も感伏して
悔ぐく思ひたる有斯く蟬丸の兄弟がちうづけ。吾々のなほ
頃日先帝仁和寺におゐて益信が戒師として落飾しつゝ
名が金剛覺とあり。太上天皇帝の号が返り。所々の名は靈
場が巡見しなひて更みなり。と然れども又の南都東
大寺に隠れおきて。橘の良利つゝ高坊として。諸國をめぐり
竊は民の患若守護目代の邪正を捜らせり。とるや依
て吾假は彼良利がさるる。我は渠は先達て諸國を巡見して

高坊ありと偽。純ら守護目代の器量が試し。躬方につくべ
者の説く躬方とあり。或は下は寛け。浮雲の富が極め不義の賊
寶が集る軍を其財寶が奪取て吾緊要の時の軍用は充
んとする疾その準備をせよう。と宣ふ。小六小七のこれと
より掌が拍く大さ。悦ひ類は一味の野武士山客が商議ひ黄
金ふやせて冠服太刀佩劍輜輳の旅の調度何れとなく調ひられ
ば。蟬丸の仮ふ橘朝臣良利は粧を。穴生兄弟は雜草の
さる。小六の岩桐右中と變名とされ。小七の左中と別号と
是も同黨は深生相若といふ童あり。這奴が扈從の次女はあか
し其餘駕馬丁。男丁より。這金腰心の者を撰てそれふ

いであうせ。領て用意采心く調ひく。蟬丸の轎輿はあきう左右
あのかまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。
み穴生兄弟を従へ。馬お山嶺の隠栖に立出てまづ出羽の國あり
みだりまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。
藤原保則が鼓吹さうて赴とぬ。話分両頭。茲は出羽國刺史藤
原のやまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。
原保則卿とまづ。先は夷賊を退治して。國中は平定し。まづ
功みまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。あきうまきうい。
當國給より。れが永井の郷といふ。知ふ家造りして。
従者許多あり。何ううまきうい。時明なる。理ある。北の方蔓の
前。國母亂子の。妹姫。まてり。まてり。まてり。まてり。
含るがごとく。次女は白雪。團かまきうい。古今獨歩の義人ふ
お。外。面。似。苦。薩。と。空。王。説。ま。る。が。如。く。奈。何。まきうい。
内。心。まきうい。物。妬。まきうい。深。く。保。則。の。侍。女。等。み。まきうい。事。

ちどあるとたの蔓の前ささきの私わたしみ彼女かのうが歩擲あふをを防ふかす動止どうし
 ありといども流石さすがみ面おもての一点いっしんむうりもその形勢けいせいが視みせぬ
 ど平素へいそは歌合うたあひせ續松つぎまつ筑紫ちくし琴こと十種じゅうしゆ香具かうき負おひをを優やさふ
 今いま破瓦やわうて鄙ひみすれある美白みはくうる生れありすれ都みやとる
 鄙ひるあゝあて愛あいらぬ此道このみち上うへて此首このうた彼首かのうたの壯俊さうしゆん小松こまつが色香いろか
 迷まよひ心こころがたまにさうふ同邸どうていあり竹右たけみぎ門かどといふ壯客さうかくの子こ
 直太郎なきたろうとて廿歳にじふさいむうりの若者わかしよありしがこれこれるす賤しへんの男おとこは似に
 げなく閑雅かんがなる漢児かんにありりるが早晩いつしうとばん小松こまつとつらうかきとやう



とある末の女夫と雪々毎の私言み水りささぐと誓ひし
 阿漕が浦みひく鯛のふり重りて遂は父母の耳よりいふは庄
 司の老实性所具あれば大ひは素人吾侪斯里保あり蒙りて
 由緒より家柄あれば種姓正人の子は假借兼として家譲り
 末の栄花を樂しむと思ひし水吞農夫の竹右門がれの
 小太と野合すると幸ひは這奴等とてた者假借よとて一村の
 人み後指がされんる口惜うとて小松が太く言懲らし
 豫て音姉落葉といふ者保則々の鼓局役が勤めりた幸
 ひこれが許は縛の大畧と告やうく小松が恥けられ小松は思
 ひ合ふ中が引られは鳥の雲井が志のふひひて涙

あがみ伯母落葉が許は有で住みありぬ鼓の標はさるる
 一日二日とてとうち女子の女子同志とて馴易く伯母がうへ若
 枝といふ婢女へ小松は二ツ年もちやうく最気の輕き女子
 ありて小松はこれが辭歎として早晚憂が忘れ年月あ
 りて人送るうち蔓の前の此由風はゆめは落葉が煙あ
 りて人苦しくし。妾が遠近く召使へ誘ひ来よと云ふふ
 落葉は有難さうに夜や一頓く小松が斯と云ふふ
 小蔓の前のこまは誘ひ出さふ蔓の前の始り小松
 鄙み成長と進み有徳あり里保が小娘あれば鑑
 とやうして持はる目負は都恥うしに次女あり蔓の前の

く悦び其日より小松を遠く近く侍らして都の手をり
れとあり教授なる素より伶俐うまれれば要時が程
おふよう熟して水にお冷とよ味噌をかひくとさ
寝あるといひ起るが、おひるあるといふ或の酒を九杯とよび
をうらやまこととさあゆらると大和調の太く解くやどみ
蔓の前小松といつてさあゆらひとさあゆら二さき者と
愛めひねられど越鳥南枝ふ巢くひ胡馬北風は嘶ふと
ひみして小松の東の西直太良なる忘れぬ一夜伯母の葉
が宿直して部屋に居らぬ夜なり彼若枝が燈下針線して
若う傍に居より吾平素ふさふさ銀の釵を抜とりて若枝

み對い妻不憶此故に來り伯母の食客とさあゆら
你們おでの厄介とあり斯朝夕厚き世話ふたると喜くと
忝くと礼にあぐ言の葉を尽くるとこれと知りぬごとく妻
も災の不良が受て何る心もさる日陰の身のうちあれば詮
術なくその妻がは古くこれと心とりの礼ふ你ふおひらき
くと言つ彼釵が若枝がやとりみ措き若枝のわが平素より
慾いこと思ひ白金の釵が今小松が手にとりぬけぬ飛立お
ど喜しられど態と左右あぐの手とりぬと否く吾給仕とて
おつる君の姪おあぐませが你とて即吾為の主あるふ其
主ふ仕れがとて手恵がうらの理ある人やと固く辞るが

小松の強て年々若枝の今推辞ふくく頓て押
てうけあさる。伯母君はつれあひもろ。吾侪をねの召使
目もろもべれ。此後ともいふおれ隔かく宣へく。又伯母
君は隠くめふりありと。吾侪はあうくひで心隙なく
相譚。奈何ありても救めむべりかん。あど嬉しくさあや
み正音とちてゆめふ。小松の心中は計畧既はありぬと膝
をめてをいふ。你も定めて才ふ。是れあうん。此
は館へ移られ。縁故の同郷ある直太良ぬくといふ人とな
い。と又母の笑ひけて大く怒りぬ。倦ぬ中引りけて。妾
は此処越く。めふりあれど。女の生涯は夫といふものな

一より外は異夫が重なる女子の道みあふぬよ。の妾は
よく知て侍れ。意中より直太良ぬくの片時も忘
る。暇なく左やせん右やと萬般はあひめど。誰と言て高
量べた人。你其志操真成うて。妾はのこる。あふり
大くこる。ねが妻は只姉のごとくあひ侍る。你の日毎町
へ出給ふ。あれは何卒。妾が艶簡。私は直太良ぬくの
許し持往く。うらな。妾が為る。吾佛と。月下氷人。さうい
と。双手は合して。うち。時。余。老。く。頼。む。若。枝。は。心
と。生。死。異。ある。う。え。ふ。日。来。慾。し。と。思。ひ。く。叙。は。世。は。い。と。思。ふ
あ。れ。は。忍。地。竹。た。く。こ。う。け。て。小。松。は。對。ひ。あ。ど。て。お。も。う。い。ふ



小松



保則卿酒興
 乗じて小松を
 挑む

保則

ふち心算をやりしや。斯深き恵み蒙るもの奈何
六倍は使はる推辞もべらぐとある。直太良ぬ
やんの許え玉章が送らせし事何より心
易し。吾倚がごとく醜さめの家在し日我陰衆の
夜よりあんといふ。さうして袖褻と綻れしものあり。こ
況て你が如き高當る者のさう樂のさうどや。艶簡さ
こめてさう。羽立日竊は携行し慥に届きし。返簡は
くやいべし。快くうけふ。小松の坐み嬉しく。頃小艶簡
こまゝと認る。若枝は速としられ。赤女細心得て艶簡を受
取めて吾針盒の内みく。ぬ斯て若枝は其羽立町へて

出ゆく序。彼直太良が許は尋ね六耦は速と。小松は
切ある志の程が告る。直太良の夢うとむう喜て直は速
書をあつて。若枝が正首。あつて。一々壹朱一封し。り
いで。若枝は手て厚くねと。いり。程。若枝は。ひの外
徳つて。心中。小悦び。忙しく。飲。立還り。六耦は。彼返。首。小
松は。渡。くれ。小松は。飲。ふ。大。さ。さ。数回。若枝と。伏。膝
そ。ね。斯て。これ。始。として。小松は。直太良が。許。數。玉章が。送
る。送。は。ひ。ひ。通。り。る。後。若枝が。手
病直の夜の直太良が。部屋。忍。と。せ。私。小松。小松。遇。夜
明。ぬ。と。れ。み。送。り。出。し。者。知。る。者。又。は。さ。う。り。る。若枝は。こ

れみよりて双方より物許多食いとあか飽こと知
太良の血氣いよご定ては帝小松み逢とれと思ふも
思ろくさんあてれ町太る堀あ素越いつる落葉が部
屋えきぬ鳴呼若とて是は誠ること色みありと孔子も言
らん宣あて哉

第八回 仇女僻氷人

藤原の保則つゝ殊み好色の性質よりとる此程より北の方
葛の前よりつゝあふれの小松の鄙み稀あてあて生
れあふ不図懸想くかど葛の所がてあか兼くみふれ
も頭くあてねれし時兩は題して哥合せの余はは伊く

あて保則つゝあか入らせむい更とるとは酒燕あてれ
多の女房達もさめれつゝ琴のあてあて朗詠催馬
樂あどうといて真がそ（文）夜のふくるを忘れろがあふ
小松の流石み斯る風流とる業をさるも知らぬあれは此迄
み敢絶（と）殊とてあて酒をさる。大く酔いつれがこれ
さあて後郊屋（立）飯らんわのと端近く立出前裁の景色
が眺望玉羽の夜の例の如く伯母あてわの宿直あれは直太良
の来あさんみ逢あて這般くくみいふべ。當時又太良あて
亦く答（絶）とてあて思いつけ居るわろ忽地後より生次とい
ぶさつて者あり吐嗟とさけびてうらうらて視るふ。さう奈何飯

の東道主保則あつとつありければ大あひ駭おどろき刀祢たの今いま驚おどろかひて
かひらるとおがし。妾めかけごととれた田舎人いなかびとを捕とらつて。かどて野のを
や。放はなしむらぬみかひて。あまをあげて。大おほさな。此このあり。告つげ
さるくと有あ繫けふ徒者あつとあれが笑わらひ含ふめていひらる。保則あつとつ十分
は碎くだむひらう。のうりあれが尚なほ其手そのてをもちか。むらば音高おとこ
と制せいしむひ。汝なんぢもどて。斯かく強面哉つれなや。戀こひは上下の差別おとつがを。とや
らん。早はや日外いつせより。你なんぢも縣心想けそとら。といふ。夢ゆめがて。一いちが恥はづて。今
賈や迫まの黙止もくしとれど。今いまの思おもひと。つて切きる。志しの程ほど。言いひ
さる。幸さいひあらう。羽立あその夜よに。你なんぢが伯母おば。落葉おちが宿直とくのぬの夜よに。あ
れ。予これ竊ひそふ落葉おちが。郊へを。心こころび。行ゆべき。み。吾われ日來ひごとの思おもひが

も。さ。て。よ。あ。ど。調戲てんぎも。お。れ。を。笑わらひ。の。こ。み。て。女房達にようだちも。
み。刀祢たのい。づ。う。へ。行ゆむ。ひ。や。吾君わがきみと。呼よぶ。あ。保則あつとマ
の。小松こまつは。對たいひ。今いま言いひ。ら。敢あて。戲あそふ。あ。羽立あその夜よに。必かならずと。志しの
び。ゆ。らん。積つみ。ひ。や。さ。す。と。言いふ。と。享たのむ。も。宣のたまひ。慌忙わうぼうて。大
の方うへ。行ゆむ。ひ。ね。小松こまつの。頭かぶ。己おの。け。屋やの。へ。行ゆん。と。せ。不意ふい
も。速堂すみどうの。う。し。ろ。あり。小松こまつ侯こうね。とい。ひ。け。出い来きら。る。者ものな。
何人なんにんも。や。と。顧みれ。は。是これ強あち。別べつ人ひとも。あ。は。北きたの方かた。夢ゆめの。前まへ。て
あり。れば。小松こまつの。も。つ。と。む。う。の。敬馬けいばと。て。其その終はつそ。と。あ。ひ。れ。ふ。
何と。や。らん。氣味きみ悪わるく。懺あやめ。い。う。う。れ。ば。北きたの方かた。微こ笑わらひ。小松こまつ
う。あ。ら。む。も。駭おどろき。そ。立た女速堂にようすみどうの。陰かげ。よ。て。刀祢たのの。戲言ぎげん宣のたまひ。

直太郎情なみたろうなさけ
 いづれに
 小松の隔室こまつのかくしつ
 母はは



いちぢきやうつとさき
 一五二十審ふゆり。とのれ殊更色好ことさらいろこのの性さが値ぢ具ぐふやうこのやうにやせふこのやうに此この舎や
 一来る女房達いづれみても弥なほらうあり女おんなとさといえの義ぎ魂たまが
 嫌きらむとまふうくくして言いよりあふ信男しんなんみゆくまをくま女こそれと
 妬やむとふくもあつねどおはふれての諫いさめとてまふれど二つ点てんをう
 る用もちひめど此この宵よすこ酔よめふまふて其その方かた挑いどむよりてこ
 とびの敢あへく人ひとある知らせむ羽立はたての夜よ六む竊せうはま女ことまふくく聞き成なり
 入いま寝ねてあるへたふ吾君われがきみのそれらり知しるお你あなたとんか
 が部へ屋やへ忍しのびるふ時とき立た女おんな燈あかり火ひが圍かこんで難なんなく君きみがみ
 かんかん辭ことばを尽つくさして後のち妻つまをとりめて面おもてをあらとく
 完かん君きみの連れんふとあらひて此この後のち信女しんなん們ら挑いどむ

こと おも 休べし。汝必^い此^この^う人^にふ^まず^さあ^はれ^しとの^こり^ふは^こ小^こ松^{まつ}
 の^こ肚^{はら}裏^{うら}ふ^ま羽^{はね}立^たの^こ夜^よの^こ直^ち太^た良^らが^こ忍^{しの}び^ま来^きべ^しと^こ夜^よ多^{おほ}れ^ば序^{ついで}惡^{わる}
 一^いと^お思^{おも}ふ^まと^こ詮^{せん}方^{かた}あ^はく。未^い女^に細^ころ^ろ一^い估^ぐら^とと^こ變^{かは}り^て其^{その}夜^よ
 へ^や部^ぶを^ま還^{かへ}り^て卧^ふし^ね斯^さて^この^こ次^{つぎ}の^こ日^ひあ^はり^たれ^ば小^こ松^{まつ}
 信^{しん}と^こ心^{こころ}づ^き今^{いま}宵^よの^こさ^うつ^らの^こと^こべ^れば^らあ^はれ^ば忍^{しの}び^ま来^き
 ち^ちあ^あと^との^こ人^にあ^はく^ま。艶^{えん}簡^{かん}は^あく^ま。例^{れい}の^こ若^わ枝^えと^こ物^{もの}蔭^{かげ}え
 招^{まね}と^こ你^{おん}俄^ふ頃^{ころ}ふ^ま宿^{やど}要^や事^じあ^はく^まと^こ伯^お母^むの^こま^まと^こ梅^{うめ}て^こ此^{この}
 艶^{えん}簡^{かん}は^あく^ま。直^ち太^た良^らが^こ忍^{しの}び^ま来^きべ^しと^こ夜^よ多^{おほ}れ^ば序^{ついで}惡^{わる}
 若^わ枝^えの^こ歩^あ点^{てん}改^{かい}く^ま玉^{ぎよく}章^{しょう}を^うけ^りと^こ頃^まて^こ落^お葉^はが^あふ^ま出^いて^こ
 今^{いま}鳥^{とり}の^こ俄^ふ頃^{ころ}は^あり^まう^また^こ用^{もち}ひ^でと^こぬ^れば^あ走^{はし}り^ま宿^{やど}へ

まいりつと見が何卒暫時の出暇が玉つるべと願ひるるあ落葉の
 左も右もと免れられ若枝のよろこび慌しく己が部屋え
 りの衣者替へ町へ出て出初んとするあ明軍の誰彼の斯と
 夢て此首よりあ白粉何程買ふてとべ否吾倚りあ伽羅の油
 覓きよきと詔らゆりあれば彼首よりあ手襟袖口の類々
 もあり或ハ五倍子粉羽養齒二品三と分付られ忘れぬ
 ひと音小指くく結び元結と重荷は小附と詮方あり
 ひともいづれ角先生怪る物と頼まれて只快く
 暇をとつてふ内門賀いづく急々斯て若枝は彼奴の
 奴の店ふ立よりてあれこれと買求め初直太良が
 ひととぞあをいふいふあ

して不^ふ回^{くわい}帶^{たい}のあけひけり。いれり。ふ^と小^こ松^{まつ}より受^うけし
艶^{えん}著^{しやく}うくれと。ど^と扱^{さく}の最^{さい}前^{ぜん}あがく物^{もの}調^{てう}るさびふ^ふ帯^{たい}のあ
い^いで^で死^しに^にが^がその時^{とき}落^おせ^せて^てのあ^あと^とと^と又^{また}彼^か立^たす^すう^う店^{てん}
毎^{まい}立^た戻^{もど}りて^て尋^{もと}ね^ね問^{もん}で^で不^ふ通^{つう}な^なあ^あれ^れを^を奈^な何^{なに}せん^{せん}と^と奈^な
肆^しい^いこ^こい^いと^と帯^{たい}と^とこ^こい^いる^るげ^げて^て拵^{さか}せ^せと^とう^うい^いれ^れ見^みえ^え今^{いま}今^{いま}
詮^{せん}術^{じゆつ}あ^あく情^{じやう}あ^あり^りい^いめ^めぐ^ぐと^とふ^ふ小^こ松^{まつ}ぬ^ぬが^が急^{いそ}の要^{よう}支^しあり^りと^と
宣^{のたま}い^いく^くと^と敢^あて^てく^くさ^さく^く用^{よう}あ^ある^るあ^あら^らに^に只^{ただ}晚^{ゐん}ま^ま遠^{とほ}く^くと^と
思^{おも}ひ^ひ来^きぬ^ぬと^とい^いふ^ふと^との絆^{きん}あ^あら^らん^んと^と悪^{わる}く^く推^{おし}し^し直^{ちく}太^た良^ら許^{もと}
み^み至^{いた}る^る私^{わたくし}呼^よび^よ出^でし^し今^{いま}宵^よの^の例^{れい}の^の如^{ごと}く^く伯^{はく}母^ぼ君^{きみ}の^の宿^{しゆく}直^{ちく}あ^あれ^れい^い
う^うも^もど^ど思^{おも}ひ^ひ来^きませ^せう^う。小^こ松^{まつ}ぬ^ぬの^の玉^{たま}章^{しやう}が^が越^こえ^えと^と宣^{のたま}

い^いく^く吾^{われ}倚^よと^とあ^あり^りあ^あひ^ひら^らせ^せて^て今^{いま}鳥^{とり}の^の牝^め用^{よう}ル^る多^{おほ}く^くあ^あ倚^よや
落^おち^ちあ^あど^どして^{して}人^{ひと}目^めふ^ふら^らう^うあ^あら^らの^の一^{いち}大^{だい}き^きあ^ある^るべ^べり^りあ^あれ^れ吾^{われ}倚^よ
口^{くち}狀^{じやう}よ^よて^てと^とく^くや^やさ^さん^んと^とて^てま^まい^いり^りと^とれ^れが^が時^{とき}と^と違^{ちが}つ^つて^て思^{おも}ひ^ひ来^きぬ^ぬ
と^と最^{さい}艱^{がん}心^{しん}ふ^ふ辭^じと^とつ^つが^がい^い頃^{ころ}て^て鼓^こ一^{いち}立^た還^{かへ}る^る小^こ松^{まつ}の^の慥^{しやう}に^に艶^{えん}竹^{ちく}間^ま
片^{かた}遍^{へん}と^とせ^せり^りと^との^の言^{こと}い^いら^らふ^ふぞ^ぞ小^こ松^{まつ}の^の失^{うしな}ひ^ひい^いら^らふ^ふこと^{こと}一^{いち}毫^ごも^も
に^に厚^{あつ}く^く若^わ枝^えを^を愛^{あい}し^し。此^こう^うの^の心^{しん}易^いし^しと^と飲^のむ^む。

蟬丸 傳記 半月夜話卷之四 甲

飯三賞

